入選

手を差し伸べてくれたお姉さん

宮崎県　赤江中学校
２年　吉岡咲幸

「大丈夫？立てる？」
そう手を差し伸べてくれたお姉さんのことを、私は忘れないだろう。

８月８日。私は、別の中学に通う友人と、半年振りに会う約束をしていた。場所はカラオケ。世間話、学校の話、最近行った旅行の話。その子との時間はとても楽しくて、あっという間に時間が過ぎた。もともと１７時に解散する予定だったが、その子は家の事情で１６時３０分に帰ることになった。私もそこで帰れば良かったのだが、せっかくだし時間いっぱい歌ってから帰りなよ、と言われ、私は１７時まで時間を潰すことにした。

時刻は１６時４３分。その子が帰って１３分後のことだった。私たちの県を襲ったのは震度６弱の地震。私は一瞬、何が起こっているのか理解できず、その場で固まっていた。警報音と共に、私は地震だと理解し、行動に移した。

まずはこの密室から出よう。冷静になっていたつもりだったが、知らないうちにパニックになっていて、ドアを開くことに苦戦した。なんとかドアを開けることができた私は、安心したのか、体の力が抜け、その場に座りこんでしまった。ドアの目の前で腰を抜かしてしまい、部屋の中の荷物を取ろうにも取れなくなっていた。

恥ずかしい。恐らく高校生であろう人の視線が痛い。そう考えて、下を向いたそのとき、
「大丈夫？立てる？」
と、私より高い声が聞こえた。そして、私の視界に手が入った。その手は、隣の部屋にいたお姉さんが差し伸べてくれた手だった。私はその手を取り、震える足で立った。
「荷物は中？いっしょに行動しよう、もう大丈夫だからね。」
私はその声かけに胸が熱くなり、涙が出そうになった。母や先に帰った友人の電話に出て、私はお姉さんと共に行動をした。さっき別れたばかりの友人は、
「本当ごめん、そっちは大丈夫？私のところは大丈夫だったよ。」
と言っていた。たった４０秒の通話は、私を安心させるのに十分すぎた。
私はその後、迎えに来てくれた祖母の車に乗って家に帰った。帰る前、手を差し伸べてくれたお姉さんに、何度も頭を下げてお礼の言葉を伝えた。彼女からしたら当たり前の行為だったのか、少し驚いた表情で、私を見送った。
親切というものが最近いまいち分からなくなっていた私に、彼女は親切を教えてくれたように思った。